

## 16 傷寒学を研究する先駆

— 高若訥

郭<sup>1)</sup> 秀梅・加藤<sup>2)</sup> 久幸

中国医学史には忘れさられた人物が多くいるが、その中でも最たるのが高若訥だと思われる。

高若訥は『傷寒類要』の著者で、宋代の校正医書局のメンバー高保衡の父親であり、林億の義父にもあたる。

また、宋仁宗慶暦年の副宰相となった高官でもある。

高若訥(九九七〜一〇五五)の字は敏之、諡は文庄。

并州(山西省)榆次の人。天聖二年(一〇二三)科挙の進士科に及第して官界に入り、五十七歳のときには枢密使(副宰相にあたる)に昇進している。中国医学史上、唯一高官となった医者である。

しかし、高若訥の官歴は決して順風満帆ではなかった。一〇三六年、高若訥が殿中侍御史里行(規律検査役)を担っているとき、官僚派の宰相である呂夷簡が国都開

封の知事范仲淹との衝突を積極的に解決しなかったため、范仲淹は饒州に流罪にされた。そのため、歐陽脩が高若訥の失職を求めて書面を提出している。高氏はこの書面を仁宗に訴えて、結果、歐陽脩は夷陵令に左遷された。一〇五三年、参知政事(副宰相)となった高若訥は側近の毆殺事件で尚書左丞に降職されている。

高若訥に対する評価は、宋祁の『高文庄公墓誌銘』「淡于榮寵、峻節是甘。去位甚易、如肩担。」とある様に、清廉な官僚だったと考えられる。

高若訥は十歳で父を失い、母の病のために医学を志した。青年期には、政治家、文彦博と史炤に師事している。文彦博と高若訥は医学に深い知識を持ち、文氏は『葉準』を、高氏が『傷寒類要』と『素問誤文闕義』を著した。三書は佚してしまいが、『傷寒類要』の一部は後代の医書、本草書に散在している。

高若訥は北宋の鐘・尺の定律などに関与し、古代政治・文化に大いに貢献しているが、特筆すべきは、傷寒学の研究と人材育成にあると著者らは考えている。

宋・葉夢得『避暑録話』に「本朝公卿能医者、高文庄

一人而已。尤長于傷寒。其所以得者不可知矣。而孫兆、杜壬之徒、猶足名于一時。文庄、運州人。至今運多医、尤工傷寒、皆本高氏。余崇寧大觀間在京師、見董汲、劉寅輩、皆精曉張仲景方術、試之須教驗、非江淮以來俗工所比也。」とある。この資料から、高氏は自らが傷寒に長じているだけではなく、社会的地位を使って、優秀な弟子を教育、養成し、傷寒学に精通するグループを築き、宋代の傷寒学研究における先鋒となっていたと推測できる。しかし、『傷寒類要』は早期に佚したため、『傷寒補亡論』の郭雍自序にも「近世諸家傷寒書、如高文庄『傷寒類要』、未得其本。龐、朱二氏、伝世已久。常器之『補治論』、雖略有伝、而不得善本。」とあり、宋の郭雍さえ見ることができなかつたことがうかがい知れる。この様なことから『傷寒類要』は伝抄だけで刊行されていない可能性も考えられる。

一〇五七年に成立した校正医書局の主要メンバーは、高若訥の推薦による可能性が高いと考えられる。それは、孫用和・孫奇・孫兆の親子三人は孫思邈の子孫と自称しているが、孫兆は高若訥の弟子で私淑者である。高

保衡は高若訥の次子で、後の官職は殿中丞檢光祿寺丞である。林億は高若訥の次女の婿であることからである。

『宋会要輯稿』の記載によれば、一〇五五年七月二十四日、林億が学士院の試験に通り、秘閣に校理を任じられた。同年の八月に高若訥が死去。その後、十数年間に、林億らは中国医書の校勘、刊行に最大の成果をあげている。このような環境の中で、『傷寒論』編纂を行っていることから、少なからず『傷寒類要』の影響を受けていることは否定できない。

高若訥がいかなる医療水準を持っていたかについては、『東都事略』に「高氏は古方に拘つて、多く効かない」と評されている記載は、それを論ずるものではないと考える。これは官界に入った後のことを述べているからである。『墓誌銘』によれば、高氏が咸陽知事を務めたときには、母の病気を治しただけではなく、一般庶民も数多く診療し、当時、広く名が知れたとある。

(1) 順天堂大学医史学研究室・上海中医薬大学・

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

(2) 中国伝統医学研究所